



公開セミナー記録
「セミナー断章」
『治療技法論』

2012年1月

講義：藤田博史（精神分析医）

セミナー断章 2012年1月14日講義より

第1講：「精神分析における治療技法とはなにか？」

講義の流れ～第1回講義（3時間）の内容の流れを項目に分けて箇条書きにしてみました。今回、「セミナー断章」で取り上げているのは、水色の部分です～

「心的構造論」から「治療技法論」へ → ラカン理論は治療に使える → DSMに対する精神分析の立場 → 人間という症候 → コトバを話すヒトの「病のなかの病」 → ラカン理論のチャート（海図） → $\$ \diamond a$ (幻想の式) → $\$$ (斜線を引かれて抹消された主体) について → a (小文字の他者) について → $\$$ と a と現実界 → \diamond (ポワンソン) について → S1 について → S2 について → シニフィアンについて → ファルスについて → ファルスと切断のイメージ → 「大文字の他者」について → メタファーについて → 第三項と第三項排除効果について → $-\phi$ (ファルスの欠如の心像) について → 患者の要求 (demande) について → 幻想の式と現実界・想像界・象徴界 → 精神分裂病と一番目のシニフィアン → 三項関係から二項関係に立ち返る病い → 世界没落体験と妄想 → 逆狂性健忘 → 精神分裂病は治るか → ラカン理論を論理的に理解する必要性 → 「大文字の他者」を論理的に理解すること → 患者の要求について → スカンシオンとは → 転移の操作技法について → 「SSS(知と想定された主体)」について → 無意識に無意識を対峙させる → 生の欲動 → 死の欲動 → 倒錯者と精神分析 → 質疑応答

上の写真は、南仏・ニースの城跡公園にある石量。

そこにはフランス語で HEUREUX QUI COMME ULYSSESSE FAIT UN BON VOYAGE (幸いなるかな、ユリシーズのようによき旅をしたものは) と書かれている。

人間という症候

ラカンは「人間であるということそのものが病（やまい）なのだ」という立場をとっています。「コトバを話す」という病気。つまりコトバを話すということが、すでに症状なのです。他の動物には見られない。

コトバを話すヒトの「病のなかの病」

コトバを話す、ということが病、そのコトバを話すということのなかにさまざまな症状が現われてきます。身体の病と違って、ヒトがコトバを話すことじたいが病で、その大きな病のなかで個別の小さな病が起こっているという考え方。つまり「病のなかの病 *maladie dans les maladies*」なのです。「病のなかの病」ということは、みなさん、みんな狂っているんです。ただし、共通に狂っている部分は狂っていると定義しないわけです。たとえば、同じように日本語をしゃべって、日本語のなかに含まれているいろいろなしきたり、たとえば日本人がよくやるおじぎもおじぎの習慣のない国の人から見ると、奇妙な風景に見えるわけですね。逆にキスするのが習慣化していない日本人にとってみれば、やたら会う人ごとに頬にキスするフランス人は、ちょっとこれ、やり過ぎではないかと思ったりする。そういう文化相互の違いもあるわけです。

だから、結局のところ、人類全体が狂っているので、精神分析の究極的な役割は、人類全体を治療させる、みたいなことを考える場合もあります。人類全体が狂っている。あらぬ方向へ向かっている。だからそれ全体を治癒させる、というのも精神分析的な立場から言えないこともなく、フロイトも『文化のなかの居心地の悪さ Das Unbehagen in Der Kultur』という論文を書いています。

ラカン理論のチャート（海図）

実際にラカン理論が臨床に使えないという人、そういう人にこのセミナーに参加して欲しかったのだけれども、どのような理由から使えないとっているのか直接伺ってみたいものです。フランソワーズ・ドルト先生の臨床を見ても分かるように、むしろ臨床において重要な理論の集積といえるものです。実際、使えないというのは、特に日本の学者にそのような安易なことを言っている人が多いのですが、それはむしろ自分自身のラカン理論理解の浅薄さや個人的な精神分析的治療技量の限界を言っているように見えます。

精神分析は何よりもまず治療技法ですから、臨床で使えないどころか、臨床における治療技法そのものです。さらに言うなら、心の病という大海原を航行してゆく際の大切な海図（チャート）のようなものです。そしてこの海図はそんなに難解なものではありません。ですから臨床に使えないなどというしたり顔した知識人のまことしやかなプロバガンダも、真の分析家には滑稽なものとして聞こえます。

この一連のセミナーのなかでは、企業秘密みたいなものなので本当はあまり話したくないのだけれども（笑）、精神分析治療を根拠づけている技法の種明かしというか、フランスの分析家が行なっている手順や、実際にわたしが臨床のなかでラカン理論を活用するその仕方についてお話しようと思うのです。ですから、このセミナーで学ばれたことは、基本的にみなさんの胸のなかにしまって、口外せず、何度も反芻して、ご自身で時間をかけて熟成させていただきたいと思います。治療技法は、原則としてクライアントには知られていない方が都合が良い場合が多いのです。

先ほどラカン理論はそんなに難解なものではないといいましたが、それはどういうことかということ、クライアントに対峙しているわたしの心のなかには幾つかの図式があるだけなのです。幾つかの図式。そのメインの図式が「幻想の式」です。有名な式ですけれども、これを書いてみます。

\$◇a（幻想の式）

分析家の念頭に幻想の式があるかどうかで、臨床における姿勢が違ってきます。ラカンのいう幻想の式とはこういうものです。

\$◇a S barré poinçon petit a（エス・バレー・ポワンソン・プチタ）

フランス語で読むとこうなります。

これがSですね。斜線で描かれた抹消線を barré（バレ）と言います、\$（エス・バレ）。四角が45度傾いたこの印◇、日本語では錐印と言いますが、フランス語ではpoinçon（ポワンソン）と呼びます。これ a は petit a（プチタ）、読み方は、「エスバレー ポワンソン プチタ」ですが、わたしのゼミに来ている人たちはこの「プチタ」をわざと「フチタ」と読み違える人がいます（笑）。

これさえ知っていれば、精神医療のみならず、全ての治療関係、あるいはあらゆる人間関係の構築のなかに入っていけるのです。

\$（斜線を引かれて抹消された主体）について

この \$（S barré エス・バレ）は「斜線を引かれて抹消された主体」です。「斜線を引かれて抹消された主体」とは何か。まず斜線を引かれる前の主体ですが、これは誕生してコトバの世界に入るまでの間、まだ言語にわれわれが侵犯されていない間の一つの身体としての主体を意味しています。身体存在そのものとしての主体をこのように定義するわけです。これは科学的な仮説です。そしてその主体が言語を獲得することによって、言語で構成されてゆく自我に取って代われ、表舞台すなわち象徴界から抹消されるのです。だから生れ落ちて間もない頃の身体としての主体、本来の身体的なレベルにおける主人公としての主体は、言語の獲得と同時に言語外へ放逐され、言語のなかにあらかじめ用意されている「わたし」「ぼく」「自分」というコトバの殻によって「自我」という元々の主体とは別の主体が形成される。したがって元々の主体は、象徴の世界、言語の世界、舞台から、消し去られてしまっているという意味で、「斜線を引かれた主体」と呼ばれています。

a（小文字の他者）について

一番右側にある a（objet petit a オブジェプチタ）というのは、もちろんこれはラカンが考えだした記号ですが、複数の意味が込められています。最初に挙げられるのが amour（アムール）「愛」の頭文字としての a。それから abjet（アブジェ）。この概念の理解には多少の解説が必要です。単なる対象 object（オブジェ）ではないのですね。いわば objet（オブジェ）もどき、オブジェのようでオブジェでない。これを abjet（アブジェ）と呼びま

す。日本語にすれば「対象もどき」でしょうか。このオブジェはおぞましく堪え難き対象なので「棄却対象」とも訳されています。

\$とaと現実界

ラカンはこの a (objet petit a オブジェプチタ) によって、何を意味しようとしているのでしょうか。端的には、人が、誰しもが求めているその最終目的地、最終的な愛の場所のことです。かつて母が占めていた場所なのだとはいえるでしょう。そして、すでに母から切り離され、言語の世界に組み込まれてしまっているわたしたちには、直接それと知覚することのできない領域になっています。ですからこの $\$$ (S barré エスパレー) も、 a (objet petit a オブジェプチタ) も、コトバに囚われてしまったわれわれには、直接それと認識できないのです。そういう領域のことをラカン理論では「現実界 le réel」と呼んでいます。 a (objet petit a オブジェプチタ) も $\$$ (S barré エスパレー) も「現実界」に位置しているので、われわれの知覚がそれと認識することはできません。

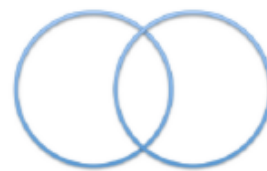


図1

◇ (ポワンソン) について

この真ん中のポワンソンというのは、学校でこういうの習ったことありますね。ベン図というのですけれども、数学の時に (図1)。 $A \cap B$ とか、 $A \cup B$ とか、こういうの習いましたよね。ここの部分のこの形。これは一般的なベン図とは違って、ちょっと特殊な二者択一の方式があるのですけれども、ラカンは「命か財布か」という例で説明していますけれども、どちらも失うことができない、でもどちらかをとることもできない。あれかこれかという選択法があるので、これをラテン語でvel ヴェルというのです。なるほど、この下半分を見るとVの形(図2)をしています。意味は「永遠に到達できない」という「不可能性」を表わしています。つまり◇ポワンソンは永遠に到達出来ない刻印だと思って下さい。



図2

ですから、この ($\$ \diamond a$) が人間の幻想を表わす式になるのです。フランス語ではfantasme ファンタズムと言います。ですから「斜線を引かれた主体は究極の対象を目指しながらも永遠にこれに到達することはできない」という、このファンタズムの構造が分析家の念頭に置かれているかどうか、これが重要ですね。つまりクライアントに対峙して、このクライアントのファンタズムについて具体的にかつ詳細に肉付けしてゆく行為こそが精神分析の根底にあるのです。

=====

精神分析医 藤田博史による
公開セミナーの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
février 2012
『セミナー通信』Webマガジン版
2012年2月発行 「セミナー通信 復刊第2号 2012年2月号」
発行 ユーロクリニック文化部 EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子
Tel:042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

=====